



ラグビー雑学あれこれ

桑原 達朗 (元) 新日本製鉄

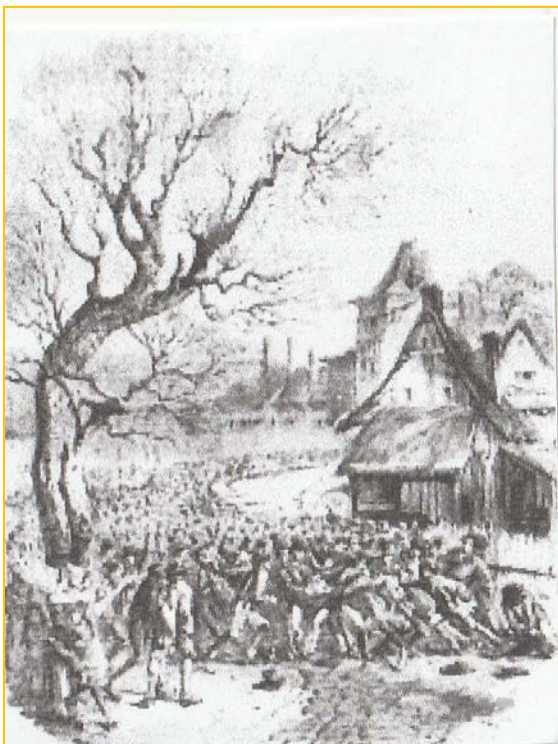


2019年のワールドカップ(RWC19)は、日本中を大いに沸かせた。多くの人々が(“にわか”ファンも含めて)、日本代表の活躍に酔いしれ、そしてラグビーの面白さと楽しさを存分に知るところとなった。

60年以上ラグビーに携わってきたものにとっては、ラグビーの認知度が上がったことは、望外の喜びであった。しかし、折角盛り上がったラグビーへの関心が、Covid-19に冷水を掛けられて、熱気が少し冷めつつあるのが残念である。ラグビーに引き続き目を向けて頂く一助となればと本稿を認めた。脈絡のない雑学の列記なので、興味ある個所でも拾い読み頂けば幸甚である。

ラグビーの生い立ち サッカー・アメフトとは同根

ラグビーの発祥の地は中世イギリス。村祭りイベントとして行われていたゲームがそのルーツとされている。村中が東西に別れて、数百人が押し合い・へし合いしながら、相手陣地にボール(ブタの膀胱からできていた)運び、相手ゴールに到達したらゲーム終了。数日かけての大掛りな行事であった。



この祭りのイベントは、あまりの激しさに怪我人が多発して幾度も中止命令を受けながら続いていた。足で蹴りあうことが基本であったので「フットボール」(Folk Football Mob Football)と呼ばれて、徐々にスポーツ化して行く。19世紀になると、パブリックスクールで男らしさを争うだけでなく、教育的価値のあるスポーツとして認知され、ゲームとしても楽しめるようになった。1823年には、「ラグビー校」でエリス少年が、腕にボールを抱えて走り出す出来事があった。これが“ラグビーの特徴的な形をはじめて示した”ものと記念碑に記されている。



学校同志の「フットボール」対抗戦が増えるなかで、ルールの取り決めが進み、徐々に統一されて行く。そのなかで、1860年から70年にかけて、相手を倒すハッキングや激しく当たるチャージングを容認するか

否かで、二つにグループが生まれた。フットに固執し、ボディコンタクトをなくしたサッカー派は、「フットボール・アソシエーション」(FA)を、ボールをキャリアして前進し、タックルで防ぐラグビー派は、「ラグビーフットボール・ユニオン」(RFU)をそれぞれ結成した。ここで「フットボール」は、サッカーとラグビーに分裂したのである。

一方、アメリカ大陸では、イングランドなどから移民した人々によって行われていた初期「フットボール」が、掴み合いや乱闘がすさまじく、死者を多く出していた。1905年、見かねた時のセオドア・ルーズベルト大統領が乗り出し、ルール改正を図った。こちらは

- ・ボールが地面についたらプレーを止める(乱闘防

止)

- ・前方パスを一回だけ認める、など発想を転換して、別の「フットボール」を誕生させた。

ラグビーはルール(規則)ではなく、ロー(法)の下でプレーされる

祭りの行事がスポーツに進化したラグビーにも、当然守るべき取り決めがあった。19世紀後半、ラグビー・フットボール・ユニオン(RFU)が設立された頃から、統一的な取り決め(いわゆるルール)が成文化されてきた。それが日本語で「競技規則」と訳されている、「The Laws of the Games」である。あえてルールではなくロー(法)としたところが、ラグビーのプレーやレフリングにとって大きな意味を持ってくる。

「The Laws」は英国生まれであるから、当然「習慣法」である。「国家法」的に規制するのではなく、様々な出来事や経験を積み重ねる過程で、内容が整えられて行く。これがラグビーの規則の基本にある。

「習慣法」であるから、不都合が生じたり、或いは良いアイデアが生まれたら、参加者の納得が得られれば、ローの内容を適宜変えて行く。0点から5点まで増加したトライの得点数の変遷(後述)は、その好例であろう。

「競技規則」の中に、“プレーして楽しく、見ても楽しむことのできるゲームのためと、プレーヤーのスキルを自由に発揮させることで喜びと楽しみを大きくするために、「The Laws」は常に見直しが行われる”と明記されていることもあって、ラグビーの“ルール”はよく変わる。

「競技規則制定の原則」に挙げられている

1. 安全性
2. 平等な参加機会(体格や能力によらず)
3. 独自性の確保(前方へのパス、タックル可など)
4. プレーの継続

などの諸点を守るために、「The Laws」は改定されて行く。特に、1項のプレーヤーの安全確保、および4項のゲームの継続促進に向けての改定は、実に頻繁に行われている。

ラグビーのレフリーはゲームを演出する

ラグビーの主審は、レフリー(Referee)と呼ばれ

ている。それはゲームを安全にそして公平に楽しむために、ゲーム中の判断を委任(refer)されたものとの意である。白か黒かの判定を下すアンパイヤとかジャッジと違って、レフリーは選手が気持ちよくプレーしてゲームを盛り上げ、試合をつくる進行役を担っている。

レフリーはゲームの継続・進行を図るために、お互いに損得のない反則や、ゲームに影響しない反則には、あえて笛を吹かないこともある。「競技規則の原則」に、安全の次に「プレーの継続」に優先順位を置いているところに由縁するものであろう。レフリーの間では、「いいレフリーは、反則をポケットにしまうことができる」との金言があると言う。

レフリーに与えられている権限の一つに、プレー中の選手に話しかけるプリベント(prevent)がある。例えば、「リリース・ザ・ボール(抱えているボール離して)」、「ハンズ・オフ(ボールから手を離して)」、「プレー・オン(なんでもないから続けて)」・・・などと声をかけて反則を減らし、ゲームの継続を図っている。今はどのビッグゲームでも、レフリーはマイクを装着しているのので、TV観戦時、少し注意して聞いてみれば声が拾えよう。

ラグビーにも多様性 だからゲームが面白い

バイデン新政権で目玉となったように、多様性が注視される昨今であるが、ラグビーにも多様性がいくつも見られる。

試合開始前に並んだ選手の中に、首一つ違う二人がいることがある。やや太めの中学生とプロレスラーくらいの体格差が、一つのチームで一緒にプレーしている。WR(World Rugby・国際統括団体)制定の「ゲームの原則」に、“ゲームに求められるスキルと身体条件に多様性があるため、あらゆる体型、サイズ、そして能力を持つプレーヤーがプレーに参加する機会を、すべてのレベルにおいて得ることになる”と記されていて、多様性が、ラグビーの楽しさや喜びの根底にあることを示唆している。

ラグビーの15のポジションには、ポジション毎に役割があり、求められるスキルと身体条件が異なっている。例えば

- ・屈強な体躯と体重が求められるポジション
主にFW前5人

- ・体格よりも俊敏性が求められるポジション
SHやSOなど
- ・走力とキック力が求められるポジション
TBやFBなど

体格やスキルも違う15人のメンバーが、トライを取るためにその肉体と頭脳をフルに働かせながら一つになるのがラグビーである。ラグビー精神を語るフレーズの一つ、「One for All, All for One」がここに生きている。



カタカナ名前の日本代表選手

桜ジャパンには、カタカナ書きの選手が多くいて、これが日本代表なのかといぶかる向きが多い。中には日本に帰化して日本国籍を持っている選手もいるが、外国籍選手も何人か存在する。

外国人が日本代表の資格を得られる要件は、他の国で代表歴がないことに加え、以下の3条件のひとつでもクリアしていることである。

- ・出生地が日本
- ・両親、祖父母のうち一人が日本人
- ・継続して3年以上日本に居住（近々5年となる予定）そして、人数の制限はない。

国際試合（テストマッチ）のためのこの取り決めは、各国共通であり、RWC19でも日本ほど多くはないが、他国籍選手を含んでいたチームがいくつもあった。この取り決めの起源は、1930年代と古く、イギリスの植民地に入植した英国人選手が、国際試合に多く出場できるよう、イングランドが主導したものとされている。

国籍の多様化が進んでいる日本代表は、「One Team」のスローガンを高々とかかげて、一つのチームとしてまとめ、大躍進を遂げた。

五つのコアバリュー ラグビーの精神と文化

2009年、WR（ワールドラグビー）は、ラグビーのもたらす人格修養の中心となる5つのコアバリューを特定しラグビー憲章（Rugby Charter）にとり入れた。ここにはラグビー精神がよく表現されている。

・ Integrity（品位）

品位とはゲームの核をなすもので、誠実さとフェアプレーによって生み出される。

・ Passion（情熱）

ラグビーに関わる人々は、ゲームに対する熱意を持っている。ラグビーは、興奮を呼び、愛着心を沸かせ、世界中のラグビーファミリーとの一体感を生む。

・ Solidarity（結束）

ラグビーは、生涯続く友情、絆、チームワーク、そして、文化的、地理的、宗教的な相違を超えた忠誠心につながる、一つにまとまった精神をもたらす。

・ Discipline（規律）

規律は、ゲームに不可欠なものであり、フィールドの内と外の両方において、競技規則(Laws)、競技に関する規定、そして、ラグビーの革新的な価値（Core Value）の順守を通じて示される。

・ Respect（尊敬）

チームメイト、相手、マッチオフィシャル、そして、ゲームに参加する人を尊敬することは、最も重要である。

日本語訳には苦心の跡がみられるが、この5要素は、ラグビーが、勝負を争う単なスポーツでなく、グラウンドの内外において楽しみそして慈しむべき文化であること示唆している。

変っているラグビー用語

どこにも業界用語があるが、ラグビー用語にも特異な英語の言い回しが、数多く見られる。そのうち面白そうなものをいくつか紹介する。

トライ (Try)

相手ゴールにボールを持ち込むと5点が得られる

が、これがトライ (Try) と言われるのは何故だろうか。ラグビーの得点システムは何度も変更されてきた (表参照)。最初は、相手陣にボールをタッチダウンすることで、ゴールへのキックを、「試みる (トライする)」ことが出来るだけで、得点とはならず、コンバージョン・ゴールに成功して初めて得点となった。

以後の変遷のなかで、最初0点だったトライの得点は、1点から5点と増え続けた (ペナルティは2点で変わらず)。ディフェンスの向上でトライが取り難くなり、その価値が上がったことに由来している。この得点の変遷は、ラグビーの競技規則が「The Laws」であり、柔軟に事態に対応する「習慣法」としての特性をよく表しているものといえよう。

日付	トライ	コンバージョン	ペナルティ	ドロップゴール	マークからのゴール
1871-1875	得点なし	1ゴール	1ゴール	1ゴール	N/A
	試合はゴール数の差によって決定される				
	1トライ	1ゴール	1ゴール	1ゴール	N/A
1876-1885	試合はゴール数の差によって決定される。もしゴール数が等しい場合はトライ数の差によって決まる。				
1886-1891	1点	2点	3点	3点	N/A
1891-1894	2点	3点	3点	4点	4点
1894-1904	3点	2点	3点	4点	4点
1905-1947	3点	2点	3点	4点	3点
1948-1970	3点	2点	3点	3点	3点
1971-1977	4点	2点	3点	3点	3点
1977-1991	4点	2点	3点	3点	N/A
1992-現在	5点	2点	3点	3点	N/A

サイド (Side)

サイド (Side) は、他の球技とは少し違った使われ方の例である。ラグビーでは「対立するものの一方の側」という意味で、“陣地”とか“自陣”を指している。ラグビーは、相手陣地にボールを運んで得点をとるが、その際運んでいるボールを基準としてサイドが決まる。ボールを持っているプレーヤーより前方の地域が相手の陣地であり、後方が味方の陣地である。「オフサイド」とは、相手の陣地にいることを意味し、そこでプレーに参加したプレーヤーには、「オフサイド」という反則が与えられる。

ゲームが終了して敵味方なくなる「ノーサイド」も、このサイドに由来するものである。

一方、サッカーなどのサイドラインは、ラグビー

では「タッチライン」という。境界の線引きがうまく出来なかった頃には、グラウンド脇に並んだ観衆などに、ボールがタッチしたら、プレーを中断したところから来たものと言われている。

ロック (Lock)

スクラムの第2列を構成する2人をロック (Lock) という。岩 (Rock) のような大男が多いので誤解する日本人もいるが、昨今よく使われる都市封鎖・Lockdownのロックである。スクラムを組む時、ロックの二人は、フロント・ロー (第1列) 3人の腰の間に頭を入れ、鍵をかけるように両腕でしっかりバインドして力強いスクラムをつくる。まさにFW前5人をlockするのがロックの役割である。

ジャッカル (Jackal)

「ジャッカル」との動物名がラグビーのプレーの名前になっている。タックルの後、味方が密集してくる前に、倒れた相手から素早くボールを奪い取るプレーが、「ジャッカル」である。(ボールを奪わなくても、タックルされた相手がボールを離せない状態にもって行き、「ノットリリースザボール」の反則としてもよい)

元オーストラリア代表のフランカーだったジョージ・スミスがこのプレーの名手だったので、彼の異名のジャッカルがそのまま「密集で相手ボールを奪い取る」という意味になった。

比較的新しい造語であり、筆者の現役や監督時代には、全く存在していなかった。

終わりにあたって TL (トップリーグ) に注目

今年のトップリーグが面白い。RWC19で日本に魅せられた各国の代表選手が大挙(20人以上も)来日、トップリーグの各チームに加わった。主将を務めた選手も何人かいて、世界中から集まった名手の活躍で、レベルの高い試合が展開されている。

来年からは、トップリーグが新しく生まれ変わる。サッカーやバスケットボールなどのプロリーグとは異なり、実業団と独立法人が併存する「プロクラブ」の形で始めることになっている。日本代表の戦力強化や国内人気の向上をさらに推し進めることができるか、新しい組織運営やガバナンスからも目が離せない。

ラグビーには色々と興味深いものが山積している。